

富山市立図書館

図書館だより 第5号

2002年サッカーワールドカップ

クロアチアが 富山にやってくる!



《国旗の由来》

赤白青の三色旗の中央の赤白チェックは「シャホヴニツァ」と呼ばれ、中世よりクロアチア王国で使われてきた民族の象徴。その上にある5つの模様は左から古代クロアチア、トプロブニク、ダルマチア、イストニア、スラボニアの紋章である。



目次

特集 図書館の新しい動き「知と夢の自由空間」	2
私のおすすめ本	4
富山市の絵図 1	6
山田孝雄文庫の資料 5	7
レファレンスあれこれ	7
おしらせ	8

特集：新しい図書館の動き

知と夢の自由空間 せんだいメディアテークと仙台市民図書館

せんだいメディアテーク(2001.3月オープン)

せんだいメディアテーク(通称 smt)は、市営地下鉄の仙台駅から二つ目の勾当台公園駅で下車し、けやき並木で有名な定禅寺通りを西に歩いて5分の所に建っている、地下2階・地上8階の総ガラス張りの施設です。建築様式は異なりますが、外観だけを見れば当市の国際会議場に非常によく似た建物。

近くには、宮城県庁や仙台市役所、県民会館、市民会館などがあり、ロケーションとしては、宮城県の行政と文化の中心地区といえます。

当初、計画は仙台市教育委員会が所管する仙台市民ギャラリー、仙台市民図書館、映像センター、視覚障害者のための情報センターという異なった4機関の複合施設として考えられていました。

しかし、コンペティション、基本設計、実施設計と工事開始に至るまでの過程の中で、施設のあり方について再三再四の検討が行われ、「サービス」「ターミナル」「バリア」をキーワードとした、融合施設として運営されることになったそうです。

公的施設はこれまで、単独、併設、複合と区別されてきましたが、このことによって、融合という概念が新たに加わったこととなります。

《建築の特徴》

建物全体は、13本の鉄骨独立シャフト(チューブ：鋼管トラス構造)と7枚の鉄骨フラットスラブ(鉄板のサンドイッチ状フロア)によって構成されていました。簡単にいえば、13本の鋼鉄管の柱と7枚の鉄板のフロアによって組み立てられ、まわりにガラス板を張ったものをご理解いただければ分かりやすいと思います。

13本のシャフトの内、四隅に配置された4本(直

径9m)は、地震時の水平力を負担し、残り9本(直径2m)は鉛直力を負担しています。

また、シャフトは柱であると同時に、光(自然光)、空気(空調や換気)、水(上下水道や雨水や各種配管)、電気(電力幹線や情報ケーブル)、人の導線(エレベーターや階段)、物の導線(ダムウェータ)を包括していて、プレートを貫通して上下に動く様々な要素は、すべて外側から見られるようになっていました。

《フロアの配置》

7階	スタジオ：映像資料に関する企画・創造部門が集められていて、情報の編集や創造活動の場。AV資料の鑑賞・貸出フロア、映画上映の可能なスタジオシアター(180席)がある。
5/6階	天井の高さの異なるギャラリー：使用目的と展示規模によって使い分けが出来るよう、固定壁によって小規模に区分された5階ギャラリー、すべて稼働壁で構成された6階ギャラリーとがある。
3/4階	仙台市民図書館：一般・青少年を対象とした図書や参考図書を備えた図書館施設。(利用者開放端末12台、CD-ROM検索端末3台、拡大読書器4台)
2階	インフォメーション：せんだいメディアテーク活用のためのエントリースペース。新聞・雑誌の閲覧スペースやインターネット対応の開放端末(15台)が自由に使用できるフロア。幼児・児童を対象とした児童図書コーナーやおはなし室バリアフリー端末、音声読書器、拡大読書器を設置した視聴覚に障害のある利用者に支援するフロアとなっている。
1階	プラザ：外部性の強い公開空気を室内に取り込み、カフェやショップをはじめ多目スペースでのオープンスクウェアとなっている。
地下1階 / 2階	施設機器の管理スペース。有料駐車場(64台/1時間300円) 収蔵庫、書庫

仙台市民図書館(せんだいメディアテーク内)の資料と設備

《蔵書数》

- ・一般書 242,483 冊
- ・児童書 140,439 冊
- ・雑誌 720 タイトル
- ・録音図書 / 点字資料
- ・購読新聞 35 紙 (朝日新聞の地方版は全て)

《情報化への対応》

- ・インターネット対応の開放端末 15 台
- ・CD-ROM 検索端末 5 台
- ・一般室に OPAC 14 台

《ノーマライゼーションへの対応》

- ・拡大読書器 5 台、音声読書器 2 台、モバイル拡大読書
- ・バリアフリーOPAC 3 台
- ・室内すべてに点字ブロックの設置
- ・音声誘導装置や触る模型 (各階の地図) の設置
- ・磁気ループや赤外線音声補助装置の設置
- ・対面朗読やリクエスト点訳・音訳サービス
- ・各階に多目的トイレの設置や壁・手すり・洗浄ボタン・洗面台の各項目に利用者に応じた細かな配慮

《閲覧席と椅子》

(閲覧席) 一般室 : 48 席 児童コーナー : 32 席

参考室 : 60 席

(椅子席) 一般室 / 児童コーナー : 150 脚



感想

- ・図書館施設及び情報・映像関係の施設は 2 階フロアからとなっているが、1 階からのアクセスはエレベーターやエスカレーターが、開放的なフロアにうまく配置されており、図書館施設までの距離は感じませんでした。
- ・2 階フロアにはブラウザ端末 15 台が配置されてお

り、来館した午前 9 時 30 分にはすべて満席でした。(1 回 1 時間以内の利用)

・同じく、2 階フロアには、新刊雑誌 720 種が自由に閲覧でき、朝日新聞の地方版 47 紙が全てそろっていました。

・2 階フロアの一角をカーテンで仕切った児童コーナーは、ゆったりとした低書架による曲線の導線で囲まれており、奥の部分には絵本や紙芝居を配したおはなし室が設けられていましたが、高層建築特有の閉塞感はなく感じませんでした。

・一般読書室及び参考室は 3 階と 4 階を吹きぬけにし、中 2 階を設ける格好で配置されていました。一般読書室からは、天井の高い開放的な空間が創出されており、逆に、参考室の方は天井は低いが目線を下に落とすと、広々とした一般読書室を望むことができ、天井の低さが読書や調査により集中できる感じを受けました。

・参考室の 60 席はすべて着席券が必要で、担当職員にとってその管理業務が大変煩雑のように見受けられました。(学生受験勉強でも使用可能)

・図書館の資料サービスは、新聞・雑誌及び図書のみで、AV 資料 (音と映像資料) は、メディアテークの映像センターが収集提供することになっていることから、資料の収集と組織化の面で、双方の理解と調整が必要になってくると思われました。(例 図書としてのマンガはだめで映像としてのアニメはよい。仙台市の他の地区館では AV 資料を収集している。)

・入館者は施設全体で 1 日平均約 4,500 人で、その 3 分の 1 が図書館の貸出利用者だそうですが、施設の規模から見ると少ない気がしました。その原因の 1 つに、地元の反対により駐車場を設置できなかったことにあると思われます。施設管理に必要な駐車スペースを 64 台分地下に設けてあったが、市民が利用する場合は、1 時間 300 円と周辺の駐車施設に比べると非常に割高となっていました。(反対の理由 : 一般的に公共施設の駐車料金は安く設定されるため、周辺の駐車施設に影響を及ぼす懸念があること。車による来館者によって一層の交通渋滞を招く恐れがあるなど。)

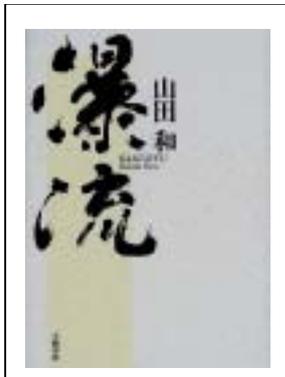
・館全体が開放的なオープンスペース (出入口が 26 箇

所)となっているが、BDS(資料無断持出防止装置)が設置されていないので、資料の不正持ち出しが起るものと思われました。すでにCDやビデオの不正持ち出しが起きているとのことでした。

・メディアテーク構想の中で、スペースの関係からはじき出された移動図書館(現在は、旧市民図書館敷地内に残されたまま。)の基地の問題は、今後、施設としてのネットワーク、情報としてのネットワーク、物流としてのネットワークの視点から見て、大きな課題となってくるように思われました。

私のおすすめ本 * * * * *

『瀑流』
山田和著
文藝春秋刊



「母なる庄川は、今、征一郎の前でさながら壮大な滝の如き姿を見せていた。それはまさに神の滝としか言いようがなかった。庄川は、コンクリートの建造物によって縊り殺されていた自然の水路を、再び恢復せんとするかのよう怒りの飛沫を四方八方へ飛ばし、すべての風景を乳色に滞らせていた。そして轟轟と、放埒なる大音声をあげながら、巨大な野獣と化して咆哮していた。山峡は殷殷たる響きをたて、重畳する飛驒山脈の奥山と照応し、遙かな天空に向かって共振していた。」

× × ×

昭和の初期、ダム建設をめぐって木材業者と電力会社が繰り広げた激しい抗争、いわゆる庄川流木事件を描いた『瀑流』の巻末に近い部分である。降り続く豪雨の中で、建設間もない小牧ダムは倒壊の危険を孕みつつ、上流から押し寄せる濁流を全門開扉して吐き続ける。下流域はダム建設の反対抗争のリーダー、岡野平吉の予想が現実となり大洪水に見舞われている。昭

《参考》せんだいメディアテークのデータ

- ・敷地面積 3,948.72 m²
- ・建築面積 2,933.12 m²
- ・規模 地下2階、地上7階+屋上階
- ・構造 鉄骨造一部鉄筋コンクリート造
- ・工事費 約130億円
- ・設計 株式会社伊東豊雄建築設計事務所

(武埴:中央館)

和九年夏のことである。

ところで、ダム建設によって引き起こされる環境破壊や生活権をめぐる反対運動は、いまま各地にあるが、この小説に描かれた庄川流木争議はその原点ともいえる。

飛驒山脈を縫うように流れ、砺波平野を南北に貫いて富山湾に注ぐ庄川は、昭和初期まで飛驒地方で産する木材を流送する大動脈で、その流れが平野部へ出る青島は木材の一大集散地として栄えていた。その動脈を分断するかたちで小牧にダム建設の計画が持ち上がったのは、ちょうど満州事変から太平洋戦争へと突き進む時代であった。

生活権を守るために立ち上がった林業者たちとその運動の牽引力となった「飛州木材」の岡野平吉。対する電力側は昭和電気、大日本電気。この抗争は流血事件まで起こした歴史的事件として記憶する方も多いであろう。

物語は、この流木事件に絡ませながら、十代で杣夫となり、後に大陸へ渡り、帰国して電力側の会社に勤めながらダム建設に疑問を抱いていく主人公柳瀬征一郎の生涯を描く。

この『瀑流』は、昨年、「別冊文藝春秋」に「忘却の河」という題で連載され、二月に出版されたばかりである。連載中の昨年五月、出身地の砺波市で著者の講演会があり、執筆の動機など色々伺う機会があった。

それによると故郷、砺波を舞台にした作品を描こう

としてこのテーマに出会ったという。そして背景とに精査された。膨大な量の資料を調べ、前後十一回の取材、さらには庄川流域で杣夫として働いていた人から話を聞き、山中で何日か野宿体験までされたという。いかにも講談社ノンフィクション賞を受賞している著者らしい。それが十分に生かされているから、説得力

して描く自然環境ばかりでなく、時代、人物を徹底的があり一気に読ませる。

わが国の近代化の過程にあった富山を舞台とした事件の真実と、時代の荒波に翻弄されながら愛し合う男女を描いた、この壮大なスケールの作品をぜひお読みいただきたい。(米田憲三)

執筆者紹介 福野町生れ。富山県歌人連盟副会長。短歌時代社同人。原型富山歌人会代表。日本ペンクラブ会員。著書に歌集『海蝕』歌集『波と浮標と』がある。

『文学が好き』荒川 洋治著 旬報社刊 『官能小説家』高橋源一郎著 朝日新聞社刊



『文学が好き』は、毎週火曜日の朝八時からのKNBラジオで「改行の割合と小説の密度」「鷗外と漱石は会ったか」など、興味深い話をしている詩人の荒川洋治氏が出した本である。短い文学エッセイを集めたものだが、その冒頭にタイトルの「ぶんがくが すき」がある。氏は白楽天の詩の一節「ぶんがくの たかくゆかしき」に着目し、最近の文学界の風潮を憂いながらもやはり文学が好きと告白する。そして、亡くなられた郷土の作家、岩倉政治氏を語っている。

「この五月、新聞の片隅で岩倉政治の死を知った。享年九七歳。富山生まれのプロレタリア作家だ。この作家のものをぼくは読んだことがないのに気づいた。その日のうちに、古い文学全集で、代表作「稲熟病」(昭和一四年)を見つけた。そしてこの誠実な作品から学んだ。当時の農村の暮らし、人々のようすを。そ

して地域的なことでも文学の文字に残すことがいかにおおきい意味をもつかについて考えた。そっと、夜ひとりで。涙をながすような気持ちで」

忘れていた何かを呼び覚ますような語り口である。全編、長いあいだ同人雑誌で書いてきた者の初心を甦らせてくれる内容である。

高橋源一郎氏の『官能小説家』は朝日新聞に連載されているところから気になっていた。連載中は「明治文学偽史」という副題が付いていた。この二月に上梓された本の冒頭には「朝日新聞『文芸』欄創設者、夏目漱石に捧ぐ」とある。

れっきとした現代小説に森鷗外や樋口一葉、一葉に小説を教えた東京朝日新聞の半井桃水なからいとうすいが時空を越えて登場する。酒場や小説教室などでのやり取りを通じてユーモラスに文学論を展開している。

「小説教室」の章にこんなくだりがある。「みんな言い訳だ。そして、言い訳の他にぼくたちが書くことはなにもないんだ」そんなあ むちゃくちゃカッコ悪いのね」「そう、きみが覚えなければならないのはそのことなんだ。つまり、この世でいちばんカッコ悪い仕事なのさ、書くことは！」

この「言い訳」が面白い。「好きだった、でもダメだった」「愛してた、でも棄てた」「戦争に行った。殺した。ごめん」これは世界的などんな名作にも当てはまる。

また、高橋氏は鷗外にこうも言わせている。「人間、いわなきゃならん時がある。その時は、ガツン！と一発かますんだ。自分に正直にな。そして、世界を凍りつかせてやれ。そうでなきゃ、作家になった意味がないだろ」

我々が同人誌に小説を書いていく上でも当然当てはまりそうだ。もちろん、先の「言い訳」は平凡では面

白くない。どうせ言い訳をするのなら、壮大な言い訳を試みたい。そして、世界を凍りつかせる作品を書きたいものだが、そういう言い訳の“泉”はそう簡単に見付かるものではない。

とにかく、書き続けて行くしかないようである。

(佐多 玲)

* この原稿は2月に依頼し、同月受領したものです。

執筆者紹介 1947 富山市生れ。'73「文学 DARA」に入り、創作活動に入る。のち文芸同人誌「渤海」創刊同人となる。『三島由紀夫の荒野』（「文学 DARA」）、『名刑事捕物控』（NHK TV ドラマ）、『星から来た男』（「渤海」）、『石を投げる蟹』（「渤海」）等の作品がある。近年は富山藩の幕末を舞台にした時代小説に取り組んでいる。

富山市の絵図 1

「旧富山城下市街図」 富山市郷土博物館所資料の複製。1枚 52×82cm



春先になると、県の中央部へ神通川沿いに強い南風が吹き降りてくる、いわゆるフェーン現象が起きて、火災が発生しやすくなります。天保2年（1831年）には、2・3・4月と続けて三度の火事がありました。

2月8日、中町より出火、40軒余り焼失。続いて3月7日、清水・石倉町で50軒余り焼失。そして三回目は、4月12日、西田地方神明社の東、浜田弥五兵衛方より出火し、8,342軒が焼失、死者70人余りという富山町最大の火事となりました。

この絵図は、焼失した範囲を表したものです。絵図の中には、江戸表に滝伴蔵が早打ちとなり江戸表へ向

かい、御覧にいれた絵図と記されています。

書き下し文にすると、「天保二年辛卯年四月一二日午之刻、西田地方浜田弥五兵衛より出火、尤も大風にて同日戌之刻まで黒筋之内残らず焼失、依って江戸表に早打ちを為し、滝伴蔵相向かい候節御覧絵図之写し」となる。

この絵図は、平成12年に「富山市立図書館開館30周年記念展示 地図でみる富山」を開催するにあたって、富山市立郷土博物館に所蔵の地図を複製したものです。 (北山：大広田分館)



〔室町後期〕写 袋綴じ たて 16.3cm × よこ 23.9cm 全 20 丁 紺色地表紙（金泥にて草花を描く） 銀地亀甲文の見返し 題簽欠 19 丁ウラに絵 1 葉あり（女人二人文を間にして泣く図） 冒頭：「其後 中納言とのより いそき とくたいしとのへ 御出あれと御つかひ有ければ さらに 行たまはずしてありける」 文中の歌 1 首：「住なれし 我ふる里を たち出て いくつの草の 露ときゆへき」

* この目録は 奥田勲 聖心女子大学教授の審定によるものです。

お伽草子というのは、およそ 14 世紀から 17 世紀前期にかけて成立した 400 種ほどの短編の物語草子類の総称で、室町物語とも呼ばれます。山田孝雄文庫にあるこの資料が 400 種のなかの何という題の短編か、まだ分かりません。19 丁ウラの挿絵の裏面に、「さくら女」と薄墨で書かれています。国会図書館所蔵の写本『桜の中將物語』や赤木文庫所蔵の寛文 10 年本問屋刊本『さくらの中將』の登場人物と同様の人物が登場し、文中の歌「住なれし云々」も同じです。確認が終っていないので、とりあえず今は「お伽草子」として紹介することにします。

また、奈良絵本というのは室町時代中期から江戸時代前期までのあいだに製作された奈良絵（この名称は奈良の絵屋町あたりで作られたらしいことに由来すると言われていています）の挿絵がある冊子状の写本です。表紙は紺色紙に金泥・銀泥の文様などが描かれることが多く、見返し（前表紙の裏）は金箔・銀箔や切箔散しが多いと言われます。

奈良絵本は、絵巻から江戸時代の絵入り版本への過渡的作品として美術史的にも価値が高いと見られ、中でも極彩色に彩られた日本風の絵は、欧米人の目を引き、英国や米国の美術館や図書館に保存されるものも多いようです。しかし、伝存するものの中には、挿絵

の部分が切り取られているものもあり、これは絵が余りに美しいため、別に表装して、鑑賞用に掛軸などにされたためと思われる。

山田孝雄文庫に所蔵する奈良絵本も、3 丁オモテ、7 丁ウラ、11 丁オモテ、15 丁ウラを欠き、奈良絵は 19 丁ウラに 1 葉あるだけです。これら欠けている部分には、あるいは製作された当時には美しい奈良絵があったのかもしれませんが。この本は桐の本箱に入れられ大切に保存されていました。（亀澤：中央館）

レファレンスあれこれ

毎日新聞の余録に美智子皇后さまが、幼い浩宮さまに歌って聞かせた子守唄の一節が載っていた。

明治の詩人・宮崎湖処子の「おもい子」という詩に思い浮かぶままにメロディ-をつけ、子守唄として外国ご訪問の時残して行かれた、と書かれていた。「おもい子」の全文を知りたい。

12 月 1 日、敬宮愛子さまがご誕生。さっそく上記のようなレファレンスがあった。

著者名検索から『明治文学全集』に宮崎湖処子の詩が載っていることがわかる。しかし、この中にはない。

参考図書の中から『日本名詩集成』を見るがここにもなし。もう一冊『詩歌全集・作家名総覧・下』を見ると『現代詩人全集・1』(新潮社)『日本詩人全集・1』(創元社)に収載していることがわかる。しかし、これらは、当館には所蔵していない。

そこで、県立図書館に問い合わせたところ、『日本現代詩体系・1』(河出書房)に全文掲載されていることがわかる。さっそく、この本を取り寄せて利用者に貸出した。

ときどき、このような詩、句、名言の全文や出典を求める質問が寄せられるが、そのほとんどは、図書館でお答えすることができる。というのは、質問されるのは、必ずいつか目にしたとか、聞いたとかいうものであり、それは、活字になっている可能性が高いからである。

今年の漢字は、“戦”だったが、昨年、おとし、...の漢字は何だったか。

この質問を受けた時、世相を反映して今年の漢字は、“戦”だったという数日前の新聞記事を思い出した。そこで、いきなり最新情報が入っているYahoo!で“世相”と入れ検索。日本漢字能力検定協会ホームページを探し出す。ここには、1995年～2000年までのその年の世相漢字が載っていた。なぜその漢字になったのかも書かれていた。ちなみに、単純に“今年の漢字”と検索してもいき当たる。

「今年の漢字」:財団法人日本漢字能力検定協会が、漢字の奥深い意味を伝授する活動の一環として、毎年年末に新聞、雑誌、インターネットにて全国公募により1年の世相漢字を決定しているもの。

福光町で、なぜバットが生産されるようになったのか。

あのイチロ-選手の木製バットも作っている福光町のバット工場。

まず、『富山大百科事典』を見るが、記述がない。そこで、『福光町史 上』を見てみると、木材資源の豊富なこの町が大正時代の木製挽物玩具に始まり、戦

後、バット生産が盛んになったいきさつなどが、詳しく書かれていた。『ふるさとの味と技~いきいき富山特産ガイド~』にもバット工場についての簡単な記述がある。(柴田:中央館)

**** おしらせ ****

《おはなしワールド》

4月23日は「子ども読書の日」です。

国民の間に広く子どもの読書活動についての関心と理解を深めると共に子どもが積極的に読書活動を高めるために、この日が法律で制定されました。

富山市立図書館では、子どもたちに読書に親しんでもらおうと次のとおり行事と展示を開催します。

1. 行事 おはなしワールド

日時 4月23日(火) 27日(土)
5月11日(土)

2. 展示 ・「優良児童図書展読んでみよう子どもの本300冊」 ・「追悼5人展」 ・「話題のファンタジー展」

会期 4月23日(火)～5月12日(日)

場所 中央館7階 特別室にて



平成14年4月15日

富山市立図書館 編集・発行